第三章　人物の特定と歴史の進行

ヒンドゥー王国の衰退とイスラム王国の勃興

第三章　人物の特定と歴史の進行

第一節　　華人移住の背景

〈81〉 中国の史書は法顕がインドに行く途中にジャワ島に立ち寄った最初の中国人であると解説している。法顕の求法の旅は 399 年から 414 年にかけて行われた。この巡礼は「仏国記」に説明されている。その百年後、すなわち 518 年に、他の僧たちの解説に比べると解説が短すぎるのではあるが、宋雲と恵生も中国からインドへ巡礼に出た。玄奘法師は 629 年から 645 年までの 17 年間インドを放浪した。かれの経験のすべては著書「西遊記」[1]にきちんとまとめられている。671 年に義浄はスリウィジャヤ経由でナランダに向けて広東から出発した。彼は詳細にその記録を「南海寄帰内法伝」と「大唐西域求法高僧伝」に解説している。中国国外での義浄の放浪は 25 年に達した。彼は 695 年(証聖元年)の真夏に 50 万頌からなる 4000 もの経典を持って帰国した。700 年から 712 年まで彼は 230 分冊で 50 の経典を翻訳した。〈82〉

7 世紀以降スリウィジャヤを訪れたのはインドの聖地へ巡礼の旅に出た中国の仏教僧だけであった。スリウィジャヤ時代、中国(広東)とスリウィジャヤ王国の Melayu 港との間に整備された航路があったことは確実である。広東からスリウィジャヤへまたその反対に航海するのは商船であった。義浄は Melayu 港あるいはスリウィジャヤ港で居住していた華人について一度も触れていない。Melayu 港から広東、あるいはその反対に向かう商船の大多数はペルシャ船やインド船の外国船であった。インドへの旅の途中、義浄はスリウィジャヤまでペルシャ船に乗った。8 世紀以前には華人商人たちは消極的な商売をしていた可能性が高いのである。その意味とは中国に商品を持ち込む外国商人が華人商人の売った商品を他の土地に運んでいたということである。この華人商人自身は広東の港で待っているだけなのであった。

8 世紀以降になると、華人商人たちの態度が変わった。南洋の諸国に魅かれたたくさんの華人商人がスリウィジャヤ、Melayu の港を訪れるようになった。宋会要[2]は、元豊五年(1082 年)の 10 月 17 日に、轉運副使兼提舉市舶司孫迥(Sun Chiang)が、中国

---

[1] (訳) 大唐西域記が正しい。西遊記はこれをもとにした冒険小説
[2] (訳) 資治通鑑の誤

語で書かれた親書を南海の国にある一般外国通商副局長が皇帝に提出したと解説している。同親書は三仏斉の一部である詹卑(Jambi)の王からのものであり、三仏斉の使節を警護する権利を与えられた同王の王女の親書もあった。彼らは 227 両(約 120kg)の装飾品とサゴヤシ、13 着の衣服を贈呈した。

8 世紀には中国はお茶の生産国になり始めていた。お茶はチベット地域で知られていただけであった。3 世紀になり、お茶を飲む習慣がチベットから中国東南部に伝わり、唐王朝時代には中国全土で普通にお茶が飲まれるようになった。このことから茶園を開く仕事が始まった。783 年に中国政府はお茶の商売を支配して国家の収入源にしようとした。お茶の栽培が大々的に行われた。茶園は国有になった。お茶を植えようとする農民は国の許可が必要になった。四川省の地域は中国南東部で最大のお茶の産地であり、陶磁器の国としても有名である。陶磁器の使用は中国国内のみならず国外でも普通になった。それ故、この陶磁器製品は中国にとっての重要な輸出商品になったのであった。お茶と陶磁器は中国にとって重要な商品であった。お茶と陶磁器は特に中国からの輸出財であった。

15 世紀初頭、明の永楽帝の時代に、東南アジア諸国を訪問した鄭和提督は各地の港に各種の中国製品があるのを目撃している。1407 年に福建海賊による破壊から Palembang が脱した後、そこに鄭和提督がインドネシアで最初の華人イスラム社会を構築した。その年に Sambas にも華人社会が続いて構築された。これは、鄭和に率いられた永楽帝の遠征実行の前に Palembang と Sambas にはすでに居住していた華人たちが存在していたということを意味している。

鄭和提督の指揮下の 1405 年の第一次遠征は Samudera Pasai[3]の港に投錨した。鄭和提督は Samudera Pasai のサルタン Abidin Bahian Syah に謁見した。鄭和の Samudera Pasai 訪問は政治関係と通商関係の構築のためであった。<84>Zainal Abidin Bahian Syah の名も、Tsai Nu Lia Pie Ting Kie と音訳されて明王朝時代の史書に述べられている。注意を引くのは中国と Samudera Pasai との関係が良くなった後、さらに多数の華人商人たちが Pasai に来訪し、当時華人ムスリムたちも多く Samudera の女性と結婚してそこに居住したゆえに、そこでは華人の子孫との混血が増加した。

[3] (訳) アチェ州ロクスマウェ郊外

これらの子孫たちは Kroceng Pirak (Lho Sukon に近い Perak 川)[4]地域に村落を形成した。

華人商人たちと Samudera Pasai の女性との婚姻に関する上記の H.M. Zainuddin の解説は、19 世紀以前の華人の移住は男性のみで構成されていたと述べた G.W. Skinnner の研究結果と合致する。彼らがやってきた新しい土地で、この華人移住者たちは現地の女性あるいは現地の華人女性と結婚した。この華人女性とは華人男性と現地人女性のとの間に生まれた女性を意味する。華人女性が東南アジアに移住し始めたのは 19 世紀の中ごろから 20 世紀初頭であった。この華人女性の移住は汽船の登場と運賃の低下に関係している。これ以来、華人男性と女性の海外移住は倍増したのであった。[5]

Babad Tanah Jawi で、領主 Wilatikata の娘で Ni Gede Manila で Raden Rahmat 別名 Sunan Ngampel の妻の名に出会う。ご存じのように、Ni Gede Manila は Tuban に居を構えた中華商館長 Gan Eng Cu の娘であった。それ以前には彼は Manila に住んでいた。上記の理論に基づくと、Manila の Gan Eng Cu は現地の女性と結婚したことになる。この婚姻から Ni Gede Manila が生まれた。すなわち Ni Gede Manila は華人の混血である。Raden Rahmat 別名 Sunan Ngampel は雲南出身の商人であった。〈85〉元の名は Bong Swi Hoo で、チャンパの最大の企業家 Bong Tak Keng の孫にあたる。さらに Raden Rahmat 別名 Sunan Ngampel は妻を連れずにインドネシアにやってきた。ジャワで 1447 年に華人混血女性と結婚している。19 世紀以前にはジャワだけではなく東南アジア各地に中国からやってくる華人女性はいなかった。このように、我々が「華人女性」と呼ぶのは、本当は華人男性と現地人女性との結婚で生まれた「混血華人女性 wanita Tionghoa Peranakan」を意味している。歴史上の人物が華人女性と結婚したことが散見される。この婚姻から生まれた女性は一般的に、中国名とジャワ名の二つの名前を持っている。ジャワ社会では(Babad Tanah Jawi と Serat Kanda で)彼女たちはジャワ/アラブ名で知られている。華人社会では中国名で知られている。その中国名は最初の一音節は名字であるから三音節から成立していない[6][7]。例として

---

[4] H.M. Zainuddin, Tarikh Aceh, 20 ページ
[5] G.W. Skinner, “The Chinese of Java” Colloquium on Overseas 1 ページ
[6] Mangaraja Onggang Parlindungan 著 Tuanku Rao 655 ページ
[7] (訳) 通常は三音節なのだが、次の例に見られるように二音節で成り立っている。

は Raden Patah 別名 Jin Bun がある。Jin Bun がマジャパヒトの支配者と華人女性の間の結婚による子孫であるため、Jin Bun の名は二音節から構成されている。名字は第一音節(名前の前)に普通は書かない。華人社会では彼は Jin Bun という名で知られていた。しかしジャワ社会では Raden Patah の名で知られていたのであった。

混血華人社会の間ではその多数が中国語を理解しなくなっていた。15 から 16 世紀には混血華人の大多数は、華人社会で教育を受けていたためまだ中国語を使えた。しかし、華人ムスリム社会が衰亡し、Sunan Ngampel がジャワイスラム社会を構築していくに従い、イスラム教徒の混血華人の多くは中国語ができなくなった。〈86〉彼らはジャワイスラムの社会で教育され育てられたからである。Sunan Ngampel の Bonang と呼ばれた息子(Sunan Bonang)は中国語が全くできなかったが、Kin San は華人イスラム社会で教育を受けたために中国語が上手であった。Bonang[8]はイスラムジャワ社会にいたからである。

中国を明王朝が支配する以前には、儒教、仏教、道教の三種の宗教があっただけと言われている。この三つの宗教は三教と呼ばれていた。元王朝が崩壊し明王朝に代わった後、ハナフィー派のイスラムがまずは雲南省、中国南部地域で発展しようとしていた。鄭和提督は政策と商業政策を進めるうえで雲南地方のムスリムたちを多数利用したのであった。

第二節　　歴史上の人物の特定

第一項　Arya Damar/Jaka Dilah

スマランの三保洞廟からの中国語の年代記は旧港(Palembang)の Swan Liong が 1456(5)年から 1471 年まで Jin Bun と Kin San の二人の男の子を育てたとはっきりと述べている。Jin Bun はマジャパヒト王 Kung Ta Bu Mi の子孫である。Kung Ta Bu Mi という王の名に大変近いのは 1474 年から 1478 年まで治世を敷いた最後のマジャパヒト王の Kertabumi である。Serat Kanda では、Raden Patah がマジャパヒトを屈服させた後、Penembahan Jimbun として認められたとはっきり述べている。Babad Tanah Jawi

[8] Sunan Ngampel の名は Bong Swi Hoo であり Bong が名字であるから Bonang の名は Bong Ang からきているように思われる。

では Raden Patah は Senapati Jimbun と名乗っている。Babad Tanah Jawi のみならず Serat Kanda でも Raden Patah は Palembang の Arya Damar に育てられたと語っている。Panembahan Jimbun (Serat Kanda)あるいは Senapati Jimbun (Babad Tanah Jawi) は Jin Bun (三保洞廟年代記)と同一人物である。<87>したがって Arya Damar は Swan Lion と同一人物ということになる。

三保洞廟年代記は Swan Liong がマジャパヒト王の Hyang Wi Si Saの息子だと解説している。自称 Hyang Wisesa であるマジャパヒト王は Kusumawardhani の夫の Wikramwardhana[9]である。ゆえに Swan Liong はマジャパヒト王 Wikramawardahana の息子ということになる。Wikramawardahana 王は 1389 年から 1427 年まで治世を敷いた。

Swan Liong は Cangki/Majakerta の混血華人であった。Wikramawardhana 王は Hayam Wuruk の娘である Kusumawardhani との結婚以外に Cangki/Majakerta の混血華人と結婚していたのであった。

華人社会との関係では彼は中国語の Swan Lion という名で、一方ジャワ人社会では Arya Damar あるいは Jaka Dilah という名で有名であった。Babad Tanah Jawi にあ Jaka Dilah/ Arya Damar に関する物語は第二章の第一節 Babad Tanah Jawi にあるのでそちらを読んでください。[10]

Babad Tanah Jawi では、Jaka Dilah が母親の Ni Endang Sasmitapura の助けを得てマジャパヒトの宮廷前広場に森から野獣を連れてくるという王の望みをかなえることに成功したとある。この特別な伝承は Arya Damar の特殊性のために存在する。Usana Jawa では Arya Damar は Gajah Mada と共に Pasungiri と戦ったとある。Pamancangah には Arya Damar と Gajah Mada がバリの Bedahulu を攻撃したとある。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda では、Gajah Mada は Hayam Wuruk 王の治世下の 1364 年に死んだ[11]にもかかわらず、Gajah Mada がマジャパヒトの宰相としてマジャパヒト王国の滅亡まで常に述べられている。

上の歴史書で、Arya Damar がマジャパヒトの治安要員として仕えていたと書いて

---

9 Pararaton Page 29, line 21
10 Babad Tanah Jawi, J.J. Meinsma 出版第 1 巻 25 ページなど
11 Nagarakretagama 第 71 節 1 項

いる。〈88〉三保洞廟の中国語の年代記では、Swan Liong が 1443 年にスマランの火薬工場長になり、その後 Palembang に移動したとある。工場長は武装に関する知識があったに違いない。Swan Liong はマジャパヒト王国からの需要で火薬工場を稼働させていたことは確かである。

Babad Tanah Jawi で、Jaka Dilah が Brawijaya 王の希望を果たしえた後 Arya Damar の名を与えられで Palembang 国の支配者に取り上げられたと語っている。Arya Damar は Gresik を経由してマジャパヒトを発った。三保洞廟年代記では Swan Liong が 1443 年に Gan Eng Cu によって Palembang へ中華商館長として移動させられたとある。Palembang の Swan Liong は兼任していたのであった。Palembang の華人社会のためには商館長として、マジャパヒト王国のためには Palembang での支配人あるいはマジャパヒト王の代理としての仕事を彼は行った。

Swan Liong の Palembang への移動は Kusumawardhani から生まれた Wikramawardhana の娘の Suhita 女王の時代の 1443 年に行われた。Suhita 女王は 1427 年から 1447 年まで治世を敷いた。その時 Wikramawardhana 別名 Hyang Wisesa が死去した。Swan Liong の父 Wikrawardhana は 1427 年に崩御した。よって、Arya Damar を Palembang の知事として任命したのは Wikrawardhana ではなく、腹違いである Suhita 女王であった。Babad Tanah Jawi のこの部分は訂正が必要である。

第二項 Raden Patah/Senapati Jimbun/Panembahan Jimbun

Babad Tanah Jawi の中で、Brawijaya 王は Ni Endang Sasmitapura 以外に、華人女性[12]とチャンパ人女性と結婚しているとのべている。Brawijaya 王の三番目の妻であるチャンパ人妻は華人妻との多妻婚を望まなかった。彼女は華人妻を追い出すように王に迫った。〈89〉その華人妻はすでに妊娠していたにもかかわらずである。王はチャンパ人妻の依頼に従ったのだった。Gajah Mada は、Palembang に向かうために東風を待っていた Arya Damar に Gresik まで華人妻を送り届け王のその下賜を受け取るように命令を受けた。この華人女性の下賜を Arya Damar は喜んで受領し、Palembang まで連れて行った。おなかの中にいた赤ん坊は Palembang で生まれて

[12] Babad Tanah Jawi I 巻 p19, II 巻 p9

Raden Patah と名付けられた。

上記の Babad Tanah Jawi の解説は Raden Patah が Arya Damar と腹違いの兄弟であるという印象を与える。三保洞廟の年代記によると、Arya Damar の父は 1389 年から 1427 年まで最初に統治した Hyang Wisesa であり、Raden Patah の父は 1474 年から 1478 年まで統治した Kung Ta Bu Mi であるから、この説は全く正しくない。二人とも華人女性から生まれたが母のみならず父親も異なる。この件で、Babad Tanah jawi の知見はやや不注意である。この件は理解できる。

スマランの中国語年代史から Jin Bun が 1518 年に 63 歳で亡くなったことがわかる。すなわち Jin Bun は 1455(=1518-63)年頃に生まれたことになる。この年代記から、1456 年から 1474 年まで Swan Liong が Jin Bun を育てたということがわかる。ここで一年の差が生じる。この差はスマラン廟の暦を永楽年間の年号を経由して西暦に変換した時に出てくるものである。1456 年を 1455 年に変更するかまたその逆にするかが必要である。このようなやりかたで、この情報は Jin Bun が Palembang で生まれたとする Babad Tanah Jawi のデータと合致していることがわかるのである。

Babad Tanah Jawi によると Arya Damar は Brawijaya 王から下賜された華人女性から Raden Kusen という名の息子を得た。Raden Patah と Raden Kusen は母を同じくする父親違いの兄弟である。三保洞廟の年代記から知られることは Jin Bun と Kin San は一緒に Swan Liong に育てられたということである。<90>Kin San が Raden Kusen であると決定することができる。ジャワ人社会で彼は Kusen という名で知られており、一方華人社会では Kin San という名で知られていた。事実、Kusen(Husain)の名は Kin San の音とほとんど同じである。Husein あるいは Kusen とはイスラム式の名なのである。

Serat Kanda からは Brawijaya 王がチャンパ人妻の不妊治療として華人女性と結婚したことがわかっている。この華人女性は王の知り合いである華人商人 Babah[13] Bantong のこどもであった。中国語名は Ban Hong であったと思われる。このように、Raden Patah の母親は商人 Ban Hong 氏の子供の華人女性であった。

Babad Tanah Jawi によると、Raden Patah と Raden Kusen は Palembang のりょうしゅ太守である父親の跡を継ぐことを嫌がっていた。かれらは王宮から逃げ出して、商船

[13] Babah: 混血華人男性を呼ぶ時の尊称

に乗ってジャワに向かった。彼ら二人はスラバヤに上陸し、その後 Sunan Ngampel の塾生になった。Raden Patah はそのまま Ngampel Denta に滞在し、Nyai Gede Maloka の長女で Sunan Ngampel の孫娘と結婚した。Raden Kusen は一人でマジャパヒトに向かい Brawijaya 王に仕えた。Raden Kusen は Terung の太守に取り立てられた。Suan Ngampel の忠告で、Raden Patah は Glagah Wangi (Bintara の森)に居を構えた。そこで彼は森を切り開きモスクを作った。Raden Patah は Bintara のイスラム法学者となり付近の住民たちにイスラム教を教えた。

三保洞廟の年代史は Jin Bun と Kin San が 1474 年にジャワに向かったと述べている。彼らは二人ともスマランに上陸した。スマランの町では礼拝のためにモスクに立ち寄った。モスクの中に三保大人の像が立っているのを見て Jin Bun は悲嘆にくれた。Jin Bun は将来孔子廟にならないモスクを建てることができますようにと祈ったのであった。<91>その後、Bong Swi Hoo に逢うために Ngampel に旅を続けた。1475 年に、Jin Bun はジャワに約一年滞在した後、自分の願いがかなって Bong Swi Hoo の指示で Muria 山の麓でスマランの東側の無人の湿地帯に移住した。この地域は大変肥沃な土地で北海岸の通行を支配することができたのだった。Jin Bun は Demak に居住したのであった。

Demak で Jin Bun はイスラム法学者になった。彼は華人社会のみならずジャワ人社会から急進的なイスラム教の支持者を集めた。三年間だけで彼は 1000 人もの支持者を集めることに成功した。これらの支持者たちはイスラムの教育は受けなかったが肉体(戦闘)訓練を受けたのだった。

Jin Bun と Kin San のジャワ島に向けての出発は、マジャパヒト王国都での王の即位と関係している。Singawardhana 王は急に崩御した。これこそがパララトンでは”bhre prabu sang mokta ring kedaton[14]”「王は王宮内で亡くなった」と述べている一件である。Kertabhumi という名の Sinagara の末子がマジャパヒトの王位に上がった。この方は Singawardhana 王の叔父であった。マジャパヒト王として Kertabumi が戴冠することは、マジャパヒト王としてだけではなく Jin Bun にとっても重要な出来事であった。

Jin Bun は Ngampel で留まったが、Kin San は Bong Swi Hoo からの特別任務でマ

[14] Pararaton p32, 24 行目

ジャパヒトへの旅を続けた。Babad Tanah Jawi では、Raden Patah はヒンドゥー教を奉じる異教徒の王に仕えるのに賛成しないという理由でマジャパヒト王に謁見するという Raden Kusen の誘いを断ったと解説している。彼は Nampel に滞在しイスラム教徒の Sunan Ngampel の塾生になったのである。[15] 〈92〉

1477 年に Jin Bun はスマランの町を攻撃した。三保洞廟を除いて市内全域を占拠した。背教した華人たちに対して彼は残酷な仕打ちは取ろうとしなかった。背教した華人と非ムスリム華人に対する虐殺は起きなかった。彼ら全員をいまだ達成されていない彼の目的に使うのが重要だったからだ。造船分野ではスマランの華人たちは熟練していた。極めて戦略的な位置を占めるスマラン町での造船業を拡大するのに Jin Bun にとって彼らの技術が不可欠であった。このスマランでの華人たちが製作した船舶で Jin Bun は将来ジャワ海の制海権を持とうとしていた。これこそが彼らを生かしておいた理由なのであった。めでたくも、後日彼らの中でイスラムに入信する者もあった。Jin Bun は、後世にその支配地域を拡大する Demak とスマラン地域の住民に同情を寄せていた。この姿勢はまだ 22 歳になったばかりの指導者のとった賢明な態度であった。

Demak イスラム軍による 1477 年のスマラン攻撃は Babd Tanah Jawi と Serat Kanda には述べられていない。Babad Tanah Jawi は単に 1477 年に Brawijaya 王が Gajah Mada を呼んで、Demak が反乱を起こそうとしているかどうか尋ねた、と述べている。どんな質問がなされたかという関係ははっきりしないのである。Gaja Mada 宰相は Demak 地域にある Bintara の森が新参者たちによって開かれていることについて説明した。より詳しい説明ができるようにするため、Raden Kusen が呼ばれた。Raden Kusen は Bintara の森を切り開いている新参者とは Raden Patah という名の兄弟であると説明した。Raden Kusen は Raden Patah をマジャパヒトに連れてくる使命を与えられた。Reden Kusen はこの命令を実行した。Sripenganti まで来たときに Raden Patah は王に出会った。Brawijaya(Kertabhumi)王は自分の顔を鏡に映して Raden Patah に似ていることに気が付いた。Raden Patah は自分が王の子であることを告白し、新しい Bintara 地区を与えられた。彼は取り立てられて、Bintara の太守になったのであった。〈93〉

[15] Babad Tanah jawi II, p38

上記の Babad Tanah Jawi の解説は三保洞廟の年代史と合致している。Bong Swi Hoo とともに Jin Bun は Kertabhumi 王に謁見した。Jin Bun は王の息子であると告白し Bong Swi Hoo の勧めで Jin Bun は pangeran の称号を得て Bin Ta La (Bintara)の領主になった。Jin Bun は Demak に居を構えた。

Serat Kanda では Demak がマジャパヒトに反乱を起こしたと語っている。Demak 軍を率いた指揮官は Sunan Undung または Sunan Kudus であった。Sunan Kalijaga は Raden Patah に対して、マジャパヒト王はいまだかつてイスラムの伝播の妨害をしたことがないので、マジャパヒト王には武力を使わないようにと忠告した。Sunan Ngampel は 1406 年に亡くなった。Demak 軍の攻撃は成功した。Brawijaya(Kertabhumi)王は Gajah Mada 宰相と共に Sengguruh に避難した。二回目の攻撃の時、Brawijaya 王はバリに逃げ出したのであった。この事件は sirna ilang kertining bumi の年、サカ歴 1400 年、西暦 1478 年に起きたのであった。

マジャパヒトの崩壊についても中国語の年代史に見られる。その内容は Serat Kanda の解説とは少し異なる。Jin Bun がスマランを降伏させ Kertabumi 王の息子であると告白した後、マジャパヒトの人たちはまだイスラムに入信していなかったので、マジャパヒトの宮廷を攻撃する準備をした。Sunan Ngampel 別名 Bong Swi Hoo は Jin Bun にマジャパヒト王に対しては武力を使わないように忠告を与えた。Jin Bun はこの老師を大変尊敬していたのでこの忠告に従った。1478 年に Bong Swi Hoo が亡くなった。Jin Bun は Ngampel を通過せず、イスラム軍を率いてマジャパヒトに向けて出発した。マジャパヒトの都は攻撃された。Kertabumi 王は捕虜になり Demak に連行された。この王は Jin Bun の父親であったから、尊敬されて取り扱われた。マジャパヒト王国の偉大さの印としての財宝は馬七頭分ありそれを Demak に持ち帰った。マジャパヒトの宮殿は焼かれなかった。〈94〉

第三項 Raden Kusen/ Adipati Terung

Jin Bun 別名 Raden Patah に関する解説で、Raden Kusen 別名 Kin San に多数触れた。Raden Kusen に関してすでに解説したことはここで繰り返さない。Raden Patah と Raden Kusen は Ngampel に到着した。Raden Patah は Ngampel にとどまったが、

Raden Kusen は高官候補として王に謁見させられ、後日 Terung の太守に上げられた。

中国年代史によるとKin Sanは1475年にCangki/Majakerta経由でマジャパヒトに向かった。Cangki/Majakertaは Kin San の父親 Swan Liong の出生地であった。Ma Hong Fu 以降マジャパヒトの都で中国領事の業務をした人が 1449 年に帰国してしまい、マジャパヒトの中央政府から華人の諸グループに情報を伝える役目をする者がいなかったので、Bong Swi Hoo の忠告でマジャパヒトに出発したのであった。このようにしてKin Sanは華人社会とマジャパヒト政府とのあいだの連絡員になったのである。Kin San は Kung Ta Bu Mi (Kertabumi)王に厚遇され、彼が爆竹の製造技術に長けていたため、爆竹の製造の仕事を与えられた。彼は爆竹の製造方法を Swan Liong 別名 Arya damar から習っていた。この年代史では、Babad Tanah Jawi に書かれているような、Terung の太守に昇格したことがあるとは書かれていない。Bong Swi Hoo が彼に負担させた業務に沿って考えると、Babad Tanah Jawi の記載を受け入れることが困難であるのは確かである。いずれにせよ、Kin San はマジャパヒト王国の都に長く住むことになった。Bong Swi Hoo に何かを報告する必要があった時は、Kin San は Ngampel や Jin Bun が住んでいる Demak に出かけたのだった。荒っぽく言えば、Kin San はマジャパヒトの都で Demak のスパイの役目を果たしていたことになる。この Kin San の功績により、Raden Patah はマジャパヒトの都の状態を正しく知ることができた。この理由もあり、Jin Bun は短期間にマジャパヒトの都を奪うことができたと考えるのである。Jin Bunがマジャパヒトの都を攻めた時、Kin Sanは町の中にいた。〈95〉マジャパヒトを奪取した後、Jin Bun は彼を Demak に連れ帰った。この事件は 1478 年に起きた。それ以来 Kin San はもうマジャパヒトには住まず、Jin Bun 司令官によって別な仕事を与えられた。

Jin Bun は Kin San をスマラン知事に任命した。彼は 1478 年以降スマランの町での最高権力者となった。Kin San の提案で Tuban の Gan Eng Cu の息子の Gan Si Cang が中華商館長に任命された。Gan Si Cang と共に Kin San は、スマランの町でチーク材の製材所を再建し、その建設者の三保大人の出発以降、半分打ち捨てられていた造船所を拡張した。

Kin San と Gan Si Cang はスマランの造船所の建設と発展に大きな功績を残した。

Kin San は損傷でスマランの船渠に停泊していた Aceh の船に似せた構造として、船足を早くした。Aceh の船は Ja Tik Su (Jafar Sadik、Sunan Kudus の称号)所有であり、スマランで修理が必要であった。Kin San は高速の大型ジャンク船を建造することに成功した。この大型船で Demak の艦隊は 1526 年に西に向かいチレボンに停泊した。Kin San はこれに同乗していた。この艦隊はその後 1521 年にマラッカ攻略のために Demak 艦隊に利用された。1529 年 Kin San は 74 歳で死去した。これから、Kin San の生年は 1455 年か 56 年であると算定される。この年号は Swan Liong が Jin Bun と Kin San を養育した期間の 1456 年から 1474 年と合致する。それ故、Jin Bun と Kin San の年の差は一年であった。Kin San 別名 Raden Kusen の遺体はたくさんのスマラン住民に送られて Demak に運ばれたのであった。

第四項 Raden Rahmat/Sunan Ngampel

Babad Tanah Jawi によると、Raden Rahmat はチャンパの Makdum Ibrahim の息子である。彼は Brawijaya 王と結婚したチャンパの妃 Dwarawati の甥にあたる。Raden Rahmat は Raden Santri という名の弟がおり、チャンパ王の息子の Raden Burereh の甥であった。彼ら三人は Dwarawati 妃を訪問するためにマジャパヒトに向かった。〈96〉マジャパヒトに着いて彼らは直ちに Brawijaya 王に拝謁した。彼ら三人は歓待された。彼らは一年間マジャパヒトに滞在した。Raden Rahmat は Ni Gede Manila という名の Tumenggung Wilatikta(Tuban の県知事)の娘のマジャパヒト女性に心を奪われた。Raden Santri と Raden Burereh は Gresik に滞在した。Raden Rahmat は Sunan Ngampel という呼び名で有名であった。Serat Kanda によると Sayit Rashmat (Raden Rahmat と同じ)は、Arya Teja の孫娘で、Tuban の Tumenggung Wilatikta の子と結婚した。

Ngampel Denta では、Raden Rahmat がイスラム法学者になった。Raden Patah と Raden Kusen はマジャパヒトへの道中、Ngampel Denta に投宿した。Sunan Ngampel と Reden Patah の話の中で、彼らはジャワ島への来訪者であるということを Sunan Ngampel は見つけ出した。曰く、「私はジャワ島にやってきた外国人のイスラム法学者だ。ほんのひと時だけ王の恩恵を得てジャワのイスラム社会を指導しているので、あ

なたとは異なる。あなたはジャワ島の持ち主である先祖伝来純粋のジャワ人だ」と。この発言は、外国人としての Sunan Ngampel の血筋とジャワ人とみられた Raden Patah の血筋に差をつけるための意図があった。いずれにせよ、Sunan Ngampel は自分がジャワ人ではないことを告白したことになる。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda によると彼の出身はチャンパである。

1419 年に三保大人はチャンパの Bong Tak Keng をチャンパの華人社会の長に据えた。彼は Bong Swi Hoo という名の孫がいた。1445 年に Bong Tak Keng は Bong Swi Hoo を Swan Liong の仕事を手伝うために Palembang に派遣した。短い期間で華人惣代の Swan Liong は Bong Swi Hoo に深い信頼を寄せ Gan Eng Cu という名の Tuban の華人総代に逢うために Bong Swi Hoo は彼の使節としてジャワに向かった。Gan Eng Cu はジャワ島、特にマジャパヒト地域での華人の利益を左右する支配力を持った人であった。それ自体から、マジャパヒトの中央政府のと太いつつながりがあった。事実上彼は Tuban 港のボスであった。〈97〉マジャパヒト中央政府とのつながりで、Gan Eng Cu はマジャパヒト王を喜ばせることに成功したのであった。最初、彼は Manila で働きその後 1423 年に Manila から Tuban へ移動させられた。その当時マジャパヒトは Wikramawardhaba 王、別名 Hyang Wisesa に統治されていた。しかしながら Hyang Wisesa の統治は 1427 年までのみであった。その後は Suhita 女王に交替した。このように中華商館長として、また事実上の Tuban 港湾長として Gan Eng Cu はマジャパヒト中央政府の重要事項(利益)を取り扱ったが故に彼は A Lu Ya (Arya)の称号を Sung King Ta (Suhita 女王)から送られたのであった。

Gan Eng Cu は Bong Swi Hoo を婿として取り立て、その後 Gan Eng Cu によって Porong 川河口の Bangil の華人総代にさせられた。華人総代として彼は Bangil で支配力を持った人であった。Bong Swi Hoo はハナフィー派のイスラム教徒であった。ムスリムとして Bong Swi Hoo は彼の支配地域でまずは華人社会だけから、その後、イスラムに入信したいと希望するジャワ人社会に広げてイスラムを発展させようと努力した。Jin Bun と Kin San はマジャパヒトへの道中で Bangil の Bong Swi Hoo と出会ったのであった。Bong Swi Hoo は Jin Bun と Kin San の教師となった。Bong Swi Hoo はその 30 年前の 1445 年に Palembang で Swan Liong と出会っていたことを思い出してほしい。Swan Liong は深い信頼を得た人に息子たちを預けたがっていたことは確実である。